

研究主題「豊かに学び続ける生徒をはぐくむ10教科の授業研究」
～互恵関係のある「学びの協同活動」を通して～

1 主題設定の理由

(1) 新学習指導要領及び本校の教育目標から

本校の教育目標は「自ら学び、心豊かに自己の確立に努め、たくましく生きる生徒の育成」であり、その具体的な教育活動の柱として本年度の重点を「確かな学力の向上」、「豊かな心の醸成」としている。これらの重点を達成するために、「学びの共同体」理論（学習院大学教授 東京大学名誉教授 佐藤 学）に沿った「学びの協同活動」を実践した授業改善を図っていく。

一方、平成29年3月に示された新学習指導要領の改訂の方針では、激しく変化していく社会に対応できる能力を身につける学習方法として「知識の理解の質を高め資質・能力を育む『主体的・対話的で深い学び』（アクティブラーニング）」が、大きな要素であるとされている。そこで、「学びの協同活動」を通して毎日の授業の中で生徒が自ら学び、自分の考えをまとめ、人に伝えるために様々な形で表現することが大切だと考える。

(2) 本校生徒の実態から

本校の生徒は、生活態度、学習態度ともに全体的に落ち着いており、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動における学習に対してもまじめに取り組むことができる。平成31年4月に行われた標準学力分析結果では、各学年、どの教科においても県平均を上回っている。しかし、観点別評価で見ると多くの教科・学年において、「知識・理解」や「技能」の結果が比較的高い一方で、「思考・表現」の結果が他の観点よりも低い傾向が見られる。そこで、知識や技能を活用して課題を解決する学習を通して思考力・表現力を育成することが課題であると考ええる。

(3) 人権教育推進・太宰府市教育施策要綱の視点から

福岡県人権教育推進プラン（平成21年3月）では、「教科等指導」として、「人権教育の目標と各教科等の目標やねらいとの関連を明確にした上で、人権に関する意識・態度、実践力を養う人権教育の活動と、それぞれの目標・ねらいに基づく各教科等の指導とが、有機的・相乗的に効果を上げられるようにしていくことが重要であり、個に応じた指導を充実し、一人一人が大切にされる授業等、誰もが自分のよさや可能性を発揮し、輝くことができるような学習活動づくりに努めます」とある。また、太宰府市の教育施策要綱にも、教育の基本目標として「確かな学力、豊かな人間性、健やかな体を培い、郷土を愛する心を育み、次代を担う青少年の健全育成」とある。人権教育研修会資料（平成29年度版）には、人権教育の視点に立った授業の工夫を進めていく際の視点として「自己存在感を持たせる支援の工夫」「共感的人間関係を育成する支援の工夫」「自己選択・決定の場の工夫」が重視されている。以上のことから、豊かに学び続ける生徒をはぐくむ10教科の授業研究をしていくことは大変意義深いと考える。

(4) これまでの研究の歩みから

本校では数年来、「確かな学力の育成」を目指して、言語活動の工夫等を中心に教育研究に取り組んできた。また、学び合いを深めるために一昨年度より「学びの共同体」理論（学習院大学教授 東京大学名誉教授 佐藤 学）に基づき、「意欲・態度（課題意識）、思考力・表現力が育った生徒」を目標に、「学びの協同活動」を取り入れた授業実践を通して、授業の中で生徒同士が互恵関係のある学びをつくることを目

指してきた。平成30年度には、太宰府市教育委員会研究指定・委嘱校事業の指定を受け、研究発表会を行った。

2 主題の意味

(1) 「豊かに学び続ける生徒をはぐくむ」とは

「豊かに学び続ける」とは、本研究においては、「学びの力」が身についた生徒である。

「豊か」とは、「新しい課題に対し、多面的・多角的にアプローチしようとする意欲」であり、

「学び」とは、「新しい課題に出会ったとき、それを解決しようとする意欲（課題意識）を持ち、自分のもつ先行体験（自然体験や生活体験、既習事項）を総動員して、よりよく解決する過程及びその結果」である。

「豊かに学び続ける生徒をはぐくむ」とは、「生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者と自分の関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、健やかで豊かな未来を創る力」（国立教育施策研究所、21世紀型能力：実践力）につなげていくことである。

具体的には、次の3つの生徒像で示される。

- ア 課題意識をもって学習に臨み、その課題意識を連続・発展させる生徒【意欲・態度】※道徳性
- イ 様々な情報の中から必要なものを適切に選択し、それを自分の思いや考え、先行体験と関連づけ、よりよい答えや新たな知識・技能を主体的に創り出す生徒【思考力】
- ウ アやイの過程や結果で得られたものを対話的活動や言語活動により、他者にわかりやすく伝えることができる生徒【表現力】

アの意味…新しい課題に対し、よりよく解決するために多面的・多角的にアプローチしようとする意欲をもち、その意欲が次の課題や別の課題に活用されていく身構え

イの意味…課題解決の過程で、取り出すべき情報を「正誤・適否・軽重」から選択する力
自然体験や生活体験、既習の見方・考え方を様々に関係づけて論理的に考える力
自ら課題を把握し解決方法を考え、調べたり試行錯誤したりして、よりよく解決する力

ウの意味…学びの過程で得られたものや結果として得られたものを、対話的活動や言語活動によって他者に適切（正確性・簡易性・明瞭性）に伝える力

※言語活動…言葉による表現（言葉、文章 等）

「抽象物や具象物を用いた表現」や「描画や身体を用いた表現」を取り込んだ活動
（記号、図表・グラフ、作品、制作物、図画、歌声、五体の動き 等）

なお、本時の目標や内容に応じて、「ア～ウ」のいずれか1つを主眼に置く。

(2) 「10教科の授業研究」とは

研究の場を教科に置き、「学びの共同体」理論から、生徒一人一人が主人公となり、他者との協同活動を通して多様な考えと出会い、課題との新たな出会いと対話を実現して自らの思考を生み出し吟味することで、生徒が主体的に学びをすすめることができるという点でも価値あるものである。また、「同僚性」を重視し、個々の学びに協議の視点をあてることで、中学校の教科の壁を越えて授業改善を推進するようにする。「同僚性」とは、教師が学びの専門家として、学び育ち合う関係性のことである。例えば、授業後の協議会において、話し合いの中心は教師の技術や教材の解釈でなく、生徒がどこで学んでいたか、どこで学びがつまづいたかについて意見を交流して学び合う。その点において、それぞれ教師が教科や学年を越えて生徒一人一人の学びの具体的な姿を語り合うことが大切である。

また、平成31年度から道徳科が全面実施されたことを受けて、「考え、議論する道徳」をキーワードに、多様で効果的な指導方法の工夫として、「対話や討論などの言語活動」・「課題解決的な学習活動」・「家庭・地

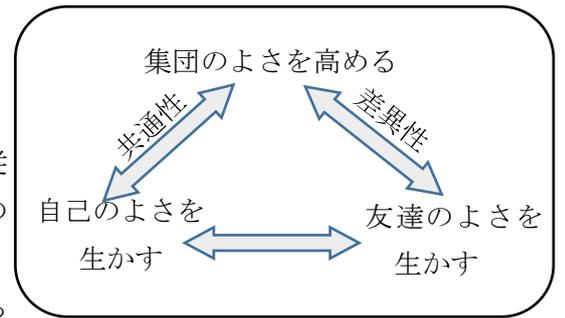
域との関連化を図った活動」の3点を研究する。

3 副主題の意味

(1) 「互恵関係のある」とは

互恵関係とは、互いに利益を得る、または利益を与え合う関係のことで、「学びの共同体」理論から、これまでの「わかる・できる生徒」が「わからない・できない生徒」に教える従来の「教え合い」とは異なり、双方向性を重視し、互恵関係のある学びを図るものである。「わからない」というつぶやきを重視し、そこから生まれる疑問を「共通性」と「差異性」から「比較・吟味」することを通して、「わかる生徒・できる生徒」も「わからない生徒・できない生徒」も学びを統合したり発展させたりすることである。

なお、「比較・吟味」とは多様性・転移性のある学びになることであり、「統合・発展」とは自分なりの結論を出すことでより高次元な学びになることである。



(2) 「学びの協同活動」とは

本研究では、教科授業づくりにおいて、次の①～③の工夫をすることである。

①学びの学習過程…「課題設定→比較・吟味→統合・発展→課題向上」の学習過程を設定する。

段階	学習過程	意味・留意点
導入	課題設定	<ul style="list-style-type: none"> 前時を想起し、「めあて」をつかむ・つくる、学習環境と出会う。 先行経験とのズレ等から知的好奇心を喚起・高揚、学習への動機付けをする。
展開前段	比較・吟味	<ul style="list-style-type: none"> 自分の課題（内容・方法）を明らかにする。 学習環境から比較・吟味（多様性・転移性のある学び）して、課題解決の方法を考え、情報の収集と取捨選択を行い、実際に試行錯誤する。 思考スキルパターンの活用
展開後段	統合・発展	<ul style="list-style-type: none"> 「難・やや難である課題」の設定 学びのグループ活動を通して、思いや考えの付加・修正・強化（補充・深化・統合）を行う。 課題の目標・内容に応じて、統合や発展（自分なりの結論・より高次元な学び）を図る。 思考スキルパターンの活用
終末	課題向上	<ul style="list-style-type: none"> 本時をまとめ、自己の学びを実感する。 次時への新たな課題意識をもつ。

②学びの目標設定…「生徒にとって『難』または『やや難』である目標設定」（生徒が背伸びしてジャンプすれば解決できる課題：学びの共同体）を設定する。

〈例〉「背伸び・ジャンプの課題：学びの共同体」

- 内容を難しくした課題
 - 活用や発展（自然・社会・日常生活等）につながる課題
 - 次の単元や学年で扱う課題
 - 主眼の評価「A」基準の課題
 - 他の教科・領域と関連した課題
- 等

③学びのグループ活動…「共通性」と「差異性」から互恵関係のある交流活動を設定する。

○形態の工夫…男女各2名4人グループ（男女市松模様）を活用する。

○活動構成の工夫…「個→グループ→全体→個」の流れをつくる。

〈留意点〉

- ・これまでの研究を継続し、「思考スキルパターン」（教師・生徒）を活用する。
- ・本時の目標や内容に応じてペアやトリオ等を導入することもある。
- ・生徒の活動を活性化させるため、統合・発展を図る観点（課題解決を支援する操作活動やヒントカード・思いや考えの方向性を支援する発問・更に難易度の高い課題等）を用意する。

3 研究の目標

豊かに学び続ける生徒をはぐくむために、互恵関係のある学びの協同活動を取り入れた教科指導の在り方について究明する。

4 研究の構想

(1) 研究仮説

教科授業において、A 互恵関係のある B「学びの協同活動」を設定すれば、課題意識・思考力・表現力が高まり、豊かに学び続ける生徒が育つであろう。

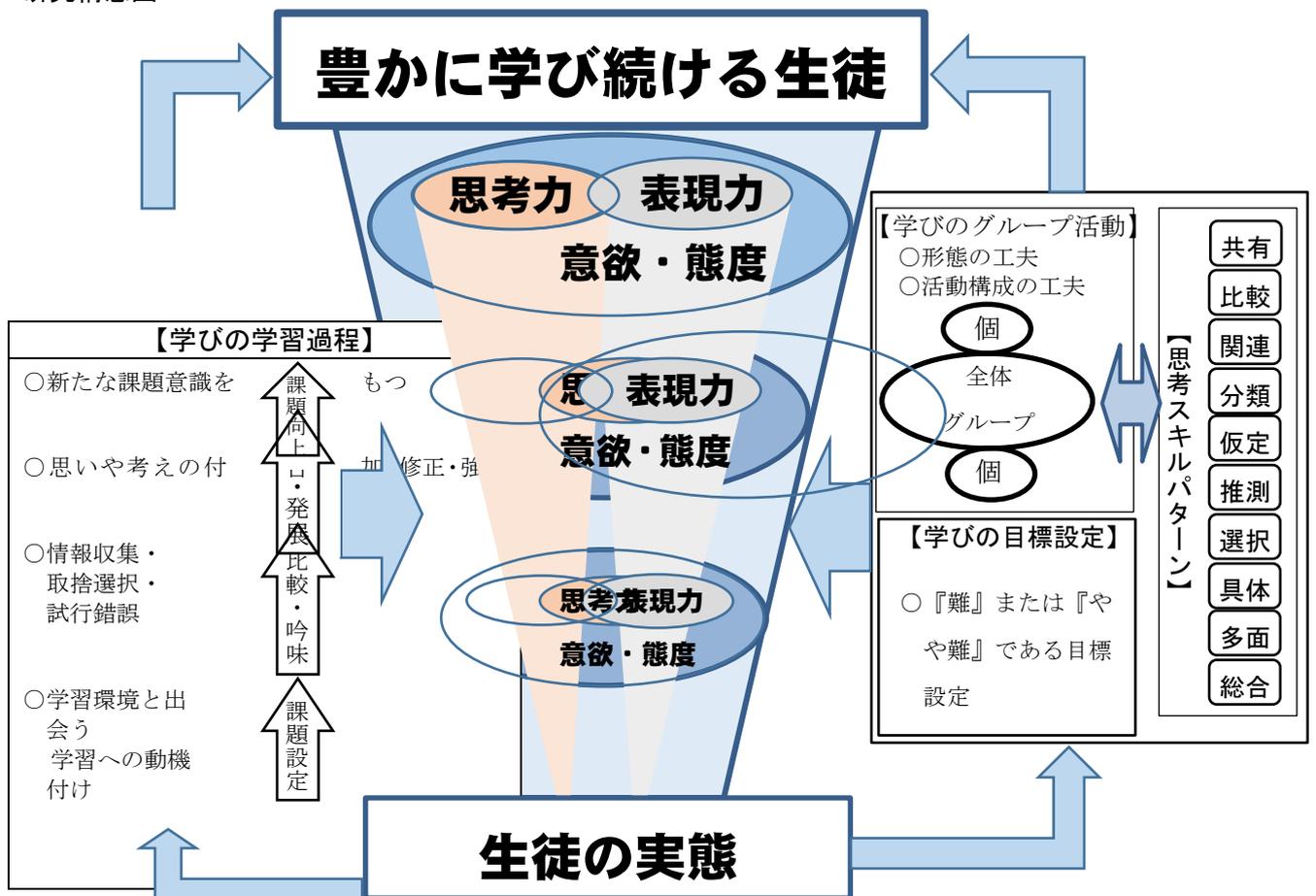
A 互恵関係のある…双方向性を重視し、考えを比較吟味して統合発展させる

B 学びの協同活動…①学びの学習過程（課題設定→比較・吟味→統合・発展→課題向上）

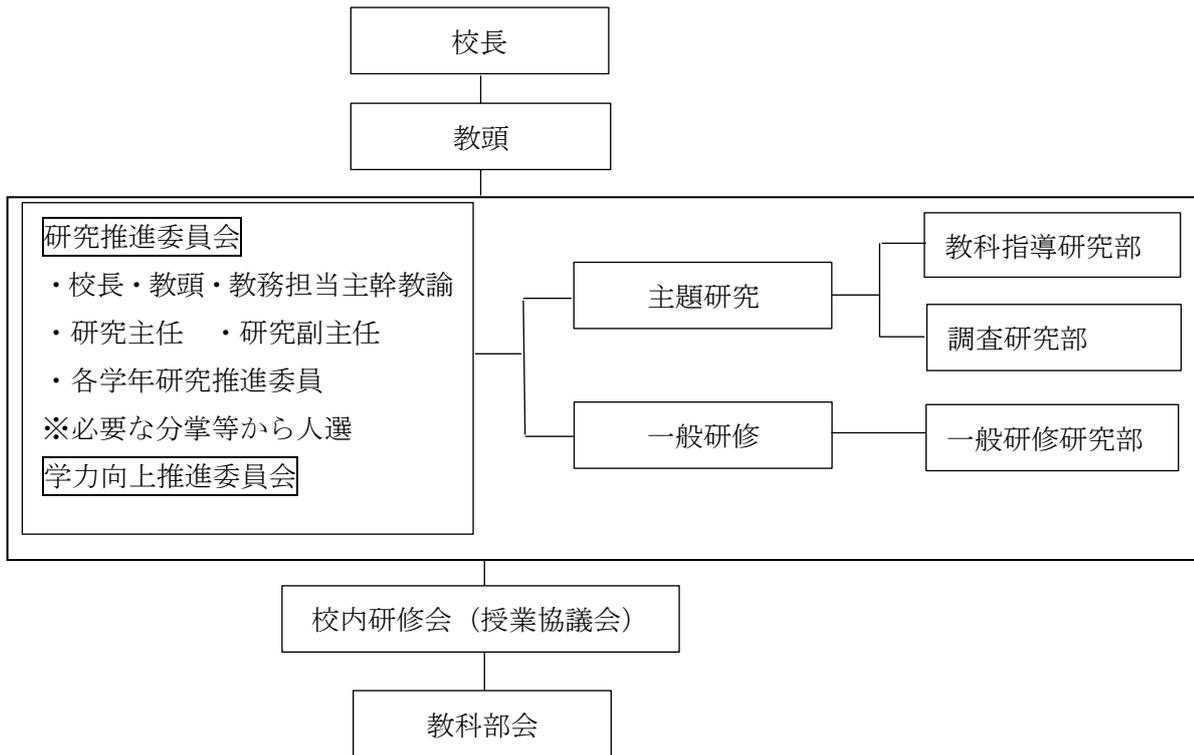
②学びの目標設定（生徒にとって『難』または『やや難』である目標設定）

③学びのグループ活動（形態の工夫、活動構成の工夫）

(2) 研究構想図



5 研究組織



6 令和3年度 校内研修年間計画

月	主題研究	一般研修
4	○「仮説解明の方途」研究	○特別支援教育に関する研修 (配慮を要する生徒の確認) ○生徒指導に関する研修 ○ICT活用に関する研修
5	○本年度の校内研究の確認	○学力向上, 授業づくりについて
6	○全体授業研究会 ○人権教育に関する研修	
7	○学年別授業研究会	○人権・同和教育について
8	○人権学習授業改善に関する研修 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">1人1回の授業公開</div>	○不登校問題, いじめ問題 ○特別支援教育について ○不祥事防止について
9		
10	○人権教育授業研修会	○食育・子どもの健康に関する研修
11	○研究発表会	
12		○本年度のまとめ
1		○年度末アンケート
2	○本年度のまとめ	
3	○来年度の計画	